

吸実性カメムシ類情報第1号（ダイズ）

令和2年9月16日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

水田においてミナミアオカメムシが多発しています！
本種のダイズほ場への移動に注意しましょう

1 発生状況

8月下旬に県内9地点18のダイズほ場で行った巡回調査において、吸実性カメムシ類の発生量は100株あたり平均0.06頭（平年0.09頭、前年0頭）と平年並でした。しかし、8月下旬に実施した水田における20回すくい取り調査では、1ほ場あたりのミナミアオカメムシ（図1）の捕獲数は0.33頭（平年0.25頭、前年0.20頭）と過去10年で3番目に多い状況です。

2 吸実性カメムシ類について

主な種は、ミナミアオカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシです。

莢伸長後期から中期を中心にダイズの子実を加害します。莢伸長初期から子実肥大初期の被害は、完全な不稔となり、板莢あるいは奇形莢の原因になります。また、子実肥大中期以降の被害は奇形粒、変色粒を引き起こすため、収量、品質の低下につながります。生息数が少なくても大きな被害が出ることもあり、1株あたり1頭の発生密度で、20～50%の被害粒率になることがあります。



図1 ミナミアオカメムシ

また、吸実性カメムシ類による加害が著しい場合、子実への養分の転流が進まないため、茎葉が緑のまま落葉しない、青立ちを引き起こすことがあります。

3 今後の見込み

名古屋地方气象台9月10日発表の1か月予報によると、向こう1か月は気温が高い見込みです。そのため、吸実性カメムシ類の増殖に好適な条件が続くことが予想されます。

また、収穫済みの水田から近隣のダイズほ場にミナミアオカメムシ等が移動する可能性があるため、注意が必要です。

4 防除対策

表1を参考に子実肥大初期（開花30～40日後）に防除を行いましょ。その後も発生が続くようであれば、7～10日後に再度防除を行いましょ。

表1 だいの吸実性カメムシ類に対する主な防除薬剤

薬剤名	成分名	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	IRACコード
トレボン乳剤	エトフェンプロックス	収穫14日前まで	散布	2回以内	3A
キラップフロアブル	エチプロール	収穫7日前まで	散布、無人ヘリコプターによる散布	2回以内	2B
スタークル液剤10	ジノテフラン	収穫7日前まで	散布、無人航空機による散布 空中散布	2回以内	4A
アルバリン/スタークル顆粒水溶剤	ジノテフラン	収穫7日前まで	散布	2回以内	4A

使用回数は同一成分の剤を含む成分ごとの総使用回数に注意する。

IRACコードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

IRACコードの詳細は、https://www.jcpa.or.jp/labo/pdf/2020/mechanism_irac02.pdfを参照する。

薬剤の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守り、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。